総合教育センターだより

街路樹

発行　第　７６　号
平成２５年１０月２５日（金）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

「考える力」を養うためには

～10歳は「壁」なのか～

有名な発達心理学者のピアジェは、ちょうどこれくらい（10歳）の子どもたちは、「具体的操作期」から「形式的操作期」の段階移行期にあると考えました。つまり、見たり、聞いたり経験した際に、具体的なものをもとに考えていくやり方をしていたのが、しだいに、その具体物の背景にある法則や抽象的な関係性を理解するようになるというのです。

こうした具体的操作期から抽象的な思考能力、論理的な考えができる形式的操作期にスムーズに移行するためにはどうすればいいでしょう。この状況を先生方が「壁に直面した」と捉えるか「飛躍の時がきた」と捉えるかはとても大切なところです。なぜなら、先生方の捉え方は即、児童側のイメージにも影響を与えるからです。

この形式的操作期の考え方に導いてやるためには実は、遊びや日常生活での経験が鍵になってきます。例えば天秤の課題を理解する上で、シーソーややじろべえで実際に遊んだことがあるかどうかや、天秤でいろいろな重りを使ってバランスをとったなどの経験は大切です。体重の重い子や軽い子が、シーソーのどの部分に座るとバランスがとれてくるのか、遊びの中で「あれ」「どうして」と不思議に思う経験をしていると、体重と座る位置と二つの変数が関係しあっているかも、といった勘が働くようになります。こうした気づきが他の課題にも生かされるでしょう。すなわち、具体的な物にどれだけ多くふれ遊んだか、なじんだかが、抽象的な世界へとジャンプする考える力を養ってくれるわけです。先生方は、そのプロセスをいかに子どもたちに提供するかどうか橋渡し役といえるでしょう。休み時間や彼らの遊びの中に、ちょうどよい教材やアプローチへのヒントがたくさん隠れています。子どもたちが日常親しみなれているものの背景に、実はあるルールや関係性が発見できることに気づかせましょう。

公益社団法人 日本教育会「日本教育」H25.10.1発行 No.427
連載6 子どもの心「10歳は『壁』なのか」
法政大学文学部心理学科 教授 渡辺 弥生　より引用

子どもたちの生活の中で、具体的な体験の場は減少してきているように思います。だからこそ、「考える力の育成」に向けて、教師が意図的に、計画的に具体的な体験の場を設定し、子どもたちに考えさせ、気づかせることが必要なのだと改めて感じさせられました。

教育相談係から

相談室が歓声に包まれるときがあります。それは学校や保護者の方から「学校内に入れました。」「『〇〇してみようかな』と言い出しました。」「〇〇に参加できました。」などの報告を受けたときです。緊張した中にもちょっぴり自信をにじませた子どもの表情が浮かぶようです。子どもが自ら動き出すことが何よりも大事なことなのです。周りの大人は、そのための手助けをするだけです。その歩みは遅々としたものです。うれしくなって先走らないようにと、自戒するときでもあります。

先生方も同じような思いをすることでしょう。子どもと深くかかわっていればなおさらです。「じゃあ次は、これを」とあせらず、先ずできたことを認め、ほめ、励ましてください。次の一歩を踏み出せるように。

授業改善講座から

８月22日(木)。毎年好評を得ています授業改善講座が開催されました。授業づくりと学級経営は表裏一体との考えから、今年は特別活動について、國學院大學教授で前教科調査官の宮川八岐先生からご講義をいただきました。「よりよい人間関係・生活・授業をつくる学校・教師」～望ましい集団活動を生かす学級経営力の視点から～を演題に、実際の学級会の映像に解説を加えての具体的なご指導をいただきました。感想の一部を紹介します。

〇　子どもたちのもっている力を信じて、一人一人の思いや願いを「つなぐ」指導を充実させていきます。
〇　お互いが納得できる着地点を考えて、子どもに寄り添っていくことの大切さが分かりました。また、「受け入れていく」という人間関係づくりは、いじめのない学級づくりにつながっていくことを感じました。
〇　教師が変われば、子どもも変わる。2学期、改めて特別活動の充実を進めていきたいと思います。

また、平成25年7月に国立教育政策研究所から各学校に配付されたリーフレット「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編」が講義の中で紹介されました。特別活動の指導の仕方が分かり易く綴られており、各学校で、ご活用いただきたいと思います。